新制高等学校の校歌再制定にみるジェンダー意識の表出

―旧制中学校を前身とする高等学校と高等女学校を前身とする高等学校の比較―

Expressions of Gender Consciousness in the Re-Establishment of School Songs under the New High School System: Comparison of High Schools that Emerged from Pre-WWII Middle Schools Versus Pre-WWII Girls' High Schools

須田 珠生*

SUDA, Tamami

【要旨】本稿は，北海道内に設置された旧制中学校と高等女学校，並びにそれらの学校を引き継いだ新制高等学校を対象に，新制高等学校として発足後，校歌の変更を行ったか否かを明らかにすることを通して，戦後の男女共学化に伴うジェンダー意識を検討した。北海道内では，1950（昭和 25）年度よりすべての公立高等学校において小学区制と男女共学が実施され，学校名もいわゆる伝統校においては，旧制中等学校との連関が想起されないような学校名が冠されることとなった。旧制から新制への移行に伴い，それまでの伝統が分断される側面があった一方で，校歌に関しては旧制の学校から引き継いだ校歌をうたいつづける学校が存在した。ただ，それは旧制中学校を前身とする高等学校にのみみられる現象であり，高等女学校を前身とする学校では一切，みられなかった。戦後教育改革によって，戦前の男女別学体制から教育制度上の男女平等が実現したが，内実としては，校歌という学校文化のひとつにさえ，前身校の性差に基づく非対称的な権力構造が入り込んでいたのである。

キーワード: 校歌　旧制中学校　高等女学校　新制高等学校　ジェンダー

1．はじめに

本稿の目的は，北海道内に設置された旧制中学校と高等女学校，及びそれらの学校を前身とする新制高等学校（以下，高等学校を高校と略記）を対象に，新制高校として発足後，校歌の変更を行ったか否かを明らかにすることを通して，戦後の男女共学化に伴うジェンダー意識を検討することにある。

校歌は，国歌に代表される国民統合の歌の浸透に追随して現れた，学校という第二次集団の歌であり，周知のように，その歌詞には学校の校訓や教育方針，あるべき児童像・生徒像がうたい

* 日本学術振興会特別研究員（PD）

込まれている[1)]。1890年代に校歌を制定する学校が現れて以降，とりわけ1930年頃を境に全国的な普及を遂げた校歌であるが（須田　2020，p. 14)，戦後になると，教育理念や教育制度の変化により，歌詞を改正したり，校歌を再制定したケースが多いことが学校現場の教員によって指摘されてきた。たとえば，新潟大学教育学部高田附属小学校教官であった谷沢竜史は，雑誌『教育創造』のなかで，「終戦後，時代思潮の変遷につれて，校歌を改正したり，制定する向が多い」(谷沢　1951. 11，p. 39)と述べている。実際に，当時の新聞記事をみてみると，「同校（浅草小学校―引用者）には，明治末期に大和田建樹作詞，小山作之助作曲の校歌があるが，歌詩の中に「君父のめぐみ」「国のため」「勅語」などの文句があり，終戦とともに新時代にそわないと一切歌うことを禁じられていた。八十周年を迎えて歌える校歌がなくては寂しいと，記念事業の一つとして母校に対し卒業生には親しみを，在校生には誇りを持てるような新校歌を制定しようと学校，PTA，卒業生の間で話が持ち上がった」(『読売新聞』1953. 5. 15，6面）という記述や，「近ごろ，どの学校でも校歌をもつようになってきた。中には戦前からの校歌をそのまゝ，もしくは一部修正して用いている所もあるが，内容が今日の時世と合致せぬため新たに作った所も多いようだ」(『読売新聞』1956. 6. 30，2面）といった記述が散見され，戦後，校歌を作り替えた学校があったことがうかがえる。新聞記事にもあるように，戦後に入ってから，それまでうたっていた校歌から新たな校歌を再制定する動きがあったことは確かであろう。では、その動きは、中等教育機関においては，いかなる様相を呈していたのだろうか。

戦後教育改革によって，戦時下の国民学校は，再び小学校の名称に改められ，初等教育を施す6年制の学校となったが，1908（明治41)年以降，尋常小学校も国民学校初等科も6年制の課程であったことから大きな混乱が生じることはなかった。一方で，中等教育では従来とは全く異なる体制がつくられることとなった。すなわち，戦前の中等普通教育機関であった中学校と高等女学校の多くは，戦後，新制高校へと再編され，さらに男女別学体制から男女共学体制へ転換するという大きな変革がもたらされたのである。この変革により，中等教育では新たなジェンダー秩序がつくりだされていくこととなったが，一方で，新制高校の前身が旧制中学校である学校，なかでもいわゆる伝統校といわれる学校では，旧制中学校からの伝統を現在に至るまで堅持している学校が少なくないことも事実である。例を挙げてみると，大阪府内で最も早く設置された公立旧制中学校を前身校とする大阪府立北野高校や，福島県内で最初に設置された公立旧制中学校を前身校とする福島県立安積高校では，旧制中学校時代に制定された校歌を新制高校になってからも，ほぼそのままの歌詞でうたい続けている[2)]。さらに，卒業期についても，それぞれの学校の前身である大阪尋常中学校と福島尋常中学校の卒業生を1期生とし，その後1948（昭和23)年に新制高校に転換してもなお，そのまま継続して卒業期を重ねている。すなわち，新制高校の発足を起点として，卒業期を数え直すという仕方はとられず，旧制中学校の卒業生から数えて第何期であるかという連続性をもった示し方がなされており，教育制度がいかに変化しようとも，同じ一つの学校であるという意識が同窓生のあいだに脈々と受け継がれているのである。

校歌は，前述のように当該集団の目標や規範がうたい込まれた歌である。そうした意味では，中等教育が男女別学体制下にあった戦前においては，校歌は男女のジェンダー意識を如実に反映した歌でもあった。「めぐる親潮八十千島　海幸の郷わが根室　深き恵をたゝえつゝ　垂乳根の道いそしまむ」(北海道庁立根室高等女学校校歌）と将来の母役割を意識付ける高等女学校校歌の歌詞や，「努めよ健児一団の　熱き力は火に似たり　時至りなば日東の　国の未来を双の肩　担

いて高く地を踏まん　思いを込めて学窓の　夜半に仰ぐ北斗星」(北海道庁立岩見沢中学校校歌)とエリートへの階梯を歩んでいることを思わせる中学校校歌の歌詞が，その顕著な例であろう。

では，男女別学体制下の旧制中学校や高等女学校でうたわれていた校歌は，新制高校へと再編され，男女共学体制となった際，どのように扱われたのだろうか。新制高校は，主に公立と私立からなるが，公立学校では，全国レベルでの教育改革に規定されつつも，各地域の独自な課題に対処しつつ制度的改革が行われ，地域の独自性を反映した教育実態が現出していった。したがって，旧制中学校・高等女学校を完全に男女共学化した新制高校として設置した地域もあれば，埼玉県や群馬県のように，旧制中学校・高等女学校をそのまま新制の男子高校・女子高校として設置した地域もある。ただ，戦前からのジェンダー観が大きく揺さぶられたという点からみれば，当然，男女別学体制のまま新制高校へ転換した地域よりも，男女共学体制へ移行して新制高校を設置した地域の方が，大きな影響を被ったに違いない。

本稿では，旧制中学校・高等女学校を完全に男女共学化し，新制高校へと転換した地域として，北海道内の学校を取り上げたい。後に述べるが，北海道では新制高校の発足にあたり，小学区制・総合制・男女共学のいわゆる「三原則」のうち，小学区制と男女共学が 1950（昭和 25）年度より全面的に実施され，学校名についても，とりわけ北海道内の伝統校に対しては，旧制中等学校と新制高校との連関が想起されないような学校名がつけられた。すなわち，旧制の学校からの伝統をなるべく断ち切るような方策が講じられたのである。だが，小学区制や男女共学の実施，学校名の変更に関しては，学校側に選択の余地はなくとも，校歌を新たに制定するか，旧制の学校からうたってきた校歌をそのまま引き継ぐかは，学校側の裁量に委ねられたことであった。戦前の男女別学校から，戦後，男女共学の新制高校として再編成されるのに伴い，校歌にいかなる変化があったのか，さらに，校歌をめぐっていかなる議論があったのかを，旧制中学校から新制高校へと転換した学校，高等女学校から新制高校へと転換した学校の双方を比較しながら，各学校の学校記念誌や学校新聞を主な史料として検討していくこととしたい。

2．北海道内における旧制中学校と高等女学校の設置

(1) 旧制中学校の設置

はじめに，本節では，北海道内における旧制中学校と高等女学校の設置経緯を確認しておきたい。

旧制の中学校制度の基本を定めた中学校令が最初に公布されたのは，1886（明治 19）年 4 月 10 日のことである。この時点では，第四条と第六条において，それぞれ「高等中学校ハ全国　北海道沖縄県ヲ除ク　ヲ五区ニ分画シ毎区ニ一箇所ヲ設置ス，其区域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル」，「尋常中学校ハ各府県ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得，但，其地方税ノ支弁又ハ補助ニ係ルモノハ各府県一箇所ニ限ルベシ」(『官報』第 829 号，1886. 4. 10）と定められ，高等中学校も尋常中学校も，北海道に設置することは想定されていなかった。中学校令は 1891（明治 24）年 12 月 14 日に改正され，先の第六条が「尋常中学校ハ各府県ニ於テ便宜之ヲ設置スベキモノトス，但，土地ノ情況ニ依リ文部大臣ノ許可ヲ得テ数校ヲ設置シ又ハ本文ノ一校ヲ設置セザルコトヲ得」(『官報』第 2538 号，1891. 12. 14）と改正とされている。1891（明治 24）年に改正された中学校令では，各府県における尋常中学校の設置が原則として義務づけられることになったが，北海道に関

しては，従来の法令通り，尋常中学校の設置地域から除かれていた。法令上，北海道に中学校の設置が義務づけられるようになるのは，1899（明治 32）年 2 月 7 日に全部改正のうえ，公布された中学校令においてであり，同中学校令の第二条では，「北海道及府県ニ於テハ土地ノ情況ニ応ジ一箇以上ノ中学校ヲ設置スベシ」(『官報』第 4678 号，1899. 2. 7）と定められている。法令からも明らかであるように，1886（明治 19）年の中学校令公布以後，しばらくの間，北海道は中学校の設置に対して，他府県とは異なる措置が講じられていたのであった。

ただ，法令のうえでは，中学校の設置は義務づけられていなかったが，実際には，1899（明治 32）年 2 月 7 日公布の中学校令によって北海道内に中学校の設置が求められるより以前に，尋常中学校が北海道内にも設置されていた。1894（明治 27）年度をもって閉校しているが，1891（明治 24）年には，堀基が初代校長を，新渡戸稲造が初代教頭を務めた私立北鳴学校が設置された。くわえて，1895（明治 28）年には北海道初の公立中学校として，北海道庁立札幌尋常中学校と北海道庁立函館尋常中学校の 2 校が設置されている。両校の設置と開校については，1895（明治 28）年 3 月 26 日発行，並びに 1895（明治 28）年 5 月 7 日発行の『官報』の「学事」欄において次のように記されている。「尋常中学校設置　北海道庁ニ於テハ札幌区ニ札幌尋常中学校，函館区ニ函館尋常中学校ヲ設置シ，其開始ハ函館尋常中学校ハ来ル四月一日，札幌尋常中学校ハ未定ナリ」(『官報』第 3518 号，1895. 3. 26)，「中学校開校　札幌尋常中学校ヲ来ル六月一日ヨリ開始ス」(『官報』第 3553 号，1895. 5. 7)。その後，1920 年代前半と 1940 年代前半に，北海道内における中学校数は急増し，1945（昭和 20）年度までに，公立中学校 41 校，私立中学校 1 校の計 42 校の中学校が北海道内に設置されることとなった。表 1 は，北海道庁立札幌尋常中学校と北海道庁立函館尋常中学校の 2 校が設置された 1895（明治 28）年から 1945（昭和 20）年までの中学校数の推移を示したものである。

表 1　北海道内における旧制中学校数の推移（『北海道教育史　総括編』pp.188-191 より作成）

年度	学校数			年度	学校数		
	公立	私立	計		公立	私立	計
1895（明治 28）年	2	―――	2	1921（大正 10）年	8	1	9
1897（明治 30）年	2	―――	2	1923（大正 12）年	16	1	17
1899（明治 32）年	2	―――	2	1925（大正 14）年	19	1	20
1901（明治 34）年	2	―――	2	1927（昭和 2）年	19	1	20
1903（明治 36）年	4	―――	4	1929（昭和 4）年	19	1	20
1905（明治 38）年	4	1	5	1931（昭和 6）年	19	1	20
1907（明治 40）年	4	1	5	1933（昭和 8）年	19	1	20
1909（明治 42）年	4	1	5	1935（昭和 10）年	19	1	20
1911（明治 44）年	4	1	5	1937（昭和 12）年	20	1	21
1913（大正 2）年	6	1	7	1939（昭和 14）年	22	1	23
1915（大正 4）年	6	1	7	1941（昭和 16）年	29	1	30
1917（大正 6）年	7	1	8	1943（昭和 18）年	34	1	35
1919（大正 8）年	7	1	8	1945（昭和 20）年	41	1	42

(2) 高等女学校の設置

一方，高等女学校は，1899（明治 32）年 2 月 8 日に公布された高等女学校令第二条において「北海道及府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スベシ」(『官報』第 4679 号，1899. 2. 8）と規定され，当初からその設置が北海道にも義務づけられた。だが，法令では設置が義務づけられたものの，『北海道教育史』を著した山崎長吉によれば，北海道では，北海道庁が高等女学校の設置を躊躇していたこともあり，なかなか高等女学校の設置には至らなかったという（山崎　1977，p. 139)。北海道内で最初に高等女学校が設置されたのは，1899（明治 32）年の高等女学校令公布から 3 年を経た 1902（明治 35）年であり，同年 4 月 1 日に北海道庁立札幌高等女学校が開校した[3)]。同校が開校した前年である 1901（明治 34）年度には，全国には，公立高等女学校 62 校，私立高等女学校 8 校の計 70 校の高等女学校が設置されており，1901（明治 34）年度の時点で高等女学校が設置されていないのは，北海道，山梨県，徳島県，長崎県，鹿児島県の 1 道 4 県のみであった(文部省総務局文書課 1903，pp. 142-143)。

北海道内最初の公立高等女学校として，1902（明治 35）年 4 月に北海道庁立札幌高等女学校が開校して以降，5 年後にあたる 1907（明治 40）年までに，北海道庁立函館高等女学校，北海道庁立小樽高等女学校，北海道庁立上川高等女学校（のちの北海道庁立旭川高等女学校）の 3 校の公立高等女学校が設置され，その後，1945（昭和 20）年には，計 43 校の公立高等女学校が設置された。43 の公立高等女学校のうち，設置当初から高等女学校であった学校は 10 校であり[4)]，そのほかは，実科高等女学校，あるいは高等家政女学校から組織変更され，高等女学校となっている。

先述した旧制中学校の場合は，1895（明治 28）年から 1945（昭和 20）年までの期間，私立中学校として設置されていたのは 1905（明治 38）年に設置された北海中学校の 1 校のみであったが，高等女学校の場合は，表 2 に示したように，1920 年代から 1930 年代前半にかけて，公立高等女学校の増加に伴い，私立高等女学校の学校数も増加傾向にあったことがみてとれる。

表２　北海道内における高等女学校数の推移（『北海道教育史　総括編』pp.192-193 より作成）

年度	学校数			年度	学校数		
	公立	私立	計		公立	私立	計
1902（明治 35）年	1	―――	1	1925（大正 14）年	13	5	18
1903（明治 36）年	1	―――	1	1927（昭和 2）年	14	6	20
1905（明治 38）年	2	―――	2	1929（昭和 4）年	16	9	25
1907（明治 40）年	4	―――	4	1931（昭和 6）年	18	8	26
1909（明治 42）年	4	―――	4	1933（昭和 8）年	21	8	29
1911（明治 44）年	4	1	5	1935（昭和 10）年	21	7	28
1913（大正 2）年	4	1	5	1937（昭和 12）年	23	7	30
1915（大正 4）年	4	1	5	1939（昭和 14）年	26	7	33
1917（大正 6）年	4	1	5	1941（昭和 16）年	31	7	38
1919（大正 8）年	6	1	7	1943（昭和 18）年	45	9	54
1921（大正 10）年	8	2	10	1945（昭和 20）年	43	10	53
1923（大正 12）年	11	3	14				

3．新制高校の発足

周知の通り，旧制中学校，並びに高等女学校は，1948（昭和 23）年に廃止され，その多くは新制高校として発足することとなった。北海道内では，1948（昭和 23）年 4 月 1 日に，道立高校 89 校，市町村立高校 30 校，私立高校 20 校の計 139 校の新制高校が誕生している（北海道立教育研究所編　1989，p. 468）。この時点では，たとえば，先述した北海道庁立札幌尋常中学校は，北海道立札幌第一高校（男子校），北海道庁立函館尋常中学校は，北海道立函館高校（男子校），北海道庁立札幌高等女学校は，北海道立札幌女子高校（女子校）として発足し，男女別学体制がとられていた[5]。

ただ，文部省は，新制高校発足に際して，1948（昭和 23）年 3 月 27 日に次のような方針を示した。「新制高等学校において男女共学制を採用するかどうかは，監督庁が強制的に決定すべきことでなく，学校所在地の多数の民意を尊重して定めるべきであるが，男女に対する教育の機会均等が保証されることの必要は十分に考慮されなければならない。各都道府県において男女共学を実験的にどこかの学校で実施することは教育の将来に役立つであろう」（発学第百十七号，近代日本教育制度史料編纂会編　1957，p. 395）。すなわち，新制高校を男女共学校とするか，男女別学校とするかは，あくまで学校が置かれた地域の意向をくむかたちで決定するよう促したものの，新制の高校を男女共学化することは「教育の将来に役立つ」と述べたのであった。

北海道では，1948（昭和 23）年 11 月 1 日に発足した北海道教育委員会（以下，道教委と略記）において，北海道地区教育課長であったウィンフィルド・ニブロ（Winfield Niblo）の勧告により，1949（昭和 24）年 1 月 14 日に全四項からなる「高等学校整備一般原則」が作成され，第一項に「男女共学実施を原則とする」ことが方針として掲げられた[6]。道教委内に設けられた高等学校設備準備委員会では，「高等学校整備一般原則」に基づき，高等学校の再配置準備が進められ，結果として，1949（昭和 24）年度には北海道内の 33 校の公立高校が男女共学校となった。その後，1949（昭和 24）年 12 月 5 日に再び，道教委によって「高等学校整備統合計画実施要項」が定められ，公立高等学校の「男女共学は昭和二十五年度より全面的に実施する」（北海道教育委員会編 1950，pp. 31-32）ことが決定されることとなった。

公立の旧制中学校や公立の高等女学校が，新制の公立高校に転換するにあたっては，小山の指摘にあるように，「男女別学の高等学校が一部であれ誕生した地域と，男女共学化した地域」があり，後者の「男女共学化した地域」は，「旧制の各学校が共学の高等学校となったケース」，「各学校が共学となった点では一つめのケースと同様であったが，男女別の定員が設けられたケース」，「旧制の複数の学校が統合あるいは再編されて，共学の高等学校が生まれたケース」の 3 つのタイプに大別される（小山・石岡編 2021，p. 9）。北海道は，既に述べたように，1950（昭和 25）年度より公立高校が全面的に男女共学化されたため，「男女共学化した地域」にあたるが，男女共学化にあたっては，北海道内の各地域の事情を踏まえて，「旧制の各学校が共学の高等学校となったケース」と「旧制の複数の学校が統合あるいは再編されて，共学の高等学校が生まれたケース」の 2 パターンによって，新制の高校が再編制された。

4．新制高校発足に伴う校歌への対応

(1) 男女共学と小学区制の実施

「1. はじめに」で述べた大阪府立北野高校や福島県立安積高校は，先の 3 つのタイプに当てはめると，「旧制の各学校が共学の高等学校となったケース」であり，繰り返しになるが，旧制中学校時代に制定された校歌を新制高校となり男女共学化した後もうたい続けている。では，北海道内の「旧制の各学校が共学の高等学校となったケース」の学校では，どうだったのだろうか。本節では，旧制の中学校，及び高等女学校が，それぞれ男女共学の新制高校となった地域のなかから，1926（大正 15）年までに，庁立中学校と庁立高等女学校の双方が設置されていた地域である札幌，函館，小樽，旭川，釧路，室蘭，網走の 7 地域の学校の校歌を事例として取り上げ，前身が旧制中学校であるのか，高等女学校であるのかによって，校歌への対応に差があったのか否かをみていくことにしたい。

北海道内では，1950（昭和 25）年度からの男女共学全面実施に伴い，普通課程四五学区の小学区制の実施も同時に決定され[7]，1950（昭和 25）年度からは自身の居住地によって通学する高校が強制的に振り分けられることとなった。したがって，旧制中学校と高等女学校の双方が設置され，それらの学校がそれぞれ男女共学の新制高校となった札幌，函館，小樽，旭川，釧路，室蘭，網走の 7 地域では，たとえば，旭川の場合，入学時には，北海道立旭川女子高校（女子校）に在学していたものの，1950（昭和 25）年 4 月には，配属校替えで北海道旭川東高校（共学校，旧北海道立旭川高校（男子校））に配属となるという事態が生じることとなった。つまり，これらの 7 地域は，1950（昭和 25）年度に高校に入学した新一年生は，入学した高校を卒業することができるが，1950（昭和 25）年 4 月に新二年生となる 1949（昭和 24）年度入学生や，新三年生となる 1948（昭和 23）年度入学生のなかには，入学した高校と卒業する高校が異なる生徒が少なからず出てくる地域だったのである。

(2) 学校名の変遷

表 3 は，札幌，函館，小樽，旭川，釧路，室蘭，網走の 7 地域に設置された庁立旧制中学校が新制高校に至るまでの学校名の変遷を示したもの，表 4 は，札幌，函館，小樽，旭川，釧路，室蘭，網走の 7 地域に設置された庁立高等女学校が新制高校に至るまでの学校名の変遷を示したものである。表 3 に示した旧制の中学校を前身とする 8 校と，表 4 に示した高等女学校を前身とする 7 校の計 15 校とも，1949（昭和 24）年度までは，男子校，もしくは女子校として設置されており，1950（昭和 25）年度以降は，男女共学校となっている。各学校の設置主体をみていくと，北海道室蘭清水丘高校の前身にあたる北海道室蘭区立実科高等女学校のみ，開校当初の設置主体が室蘭区であったが，その他の 14 校は開校当初から北海道庁による設置であった。なおかつ，高等女学校の場合は，実科高等女学校や高等家政女学校からの組織変更を経て，高等女学校となるケースが，とりわけ北海道内の地方都市では頻繁にみられたが，表中に示した 7 校のうちの 6 校が，開校当初から高等女学校として開校された学校となっている。すなわち，表 3，及び表 4 に示した学校は，北海道内の各地域にいち早く設置された，いわゆる伝統校としてみることができる。

表３　庁立中学校から新制高校に至るまでの学校名の変遷（各学校の学校記念誌より作成）

	開校年月	学校名の変遷
①	1895（明治 28）年 4 月	札幌尋常中学校（男子校，1895（明治 28）年 4 月） →札幌中学校（男子校，1899（明治 32）年 4 月） →北海道庁立札幌中学校（男子校，1901（明治 34）年 6 月） →北海道庁立札幌第一中学校（男子校，1915（大正 4）年 4 月） →北海道立札幌第一高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道札幌南高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
②	1895（明治 28）年 4 月	函館尋常中学校（男子校，1895（明治 28）年 4 月） →函館中学校（男子校，1899（昭和 32）年 4 月） →北海道庁立函館中学校（男子校，1901（明治 34）年 6 月） →北海道立函館高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道函館中部高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
③	1902（明治 35）年 4 月	北海道庁立小樽中学校（男子校，1902（明治 35）年 5 月） →北海道立小樽高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道小樽潮陵高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
④	1903（明治 36）年 5 月	北海道庁立上川中学校（男子校，1903（明治 36）年 5 月） →北海道庁立旭川中学校（男子校，1915（大正 4）年 4 月） →北海道立旭川高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道旭川東高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑤	1913（大正 2）年 4 月	北海道庁立第二中学校（男子校，1913（大正 2）年 4 月） →北海道庁立札幌第二中学校（男子校，1915（大正 4）年 4 月） →北海道立札幌第二高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道札幌西高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑥	1913（大正 2）年 4 月	北海道庁立釧路中学校（男子校，1913（大正 2）年 4 月） →北海道立釧路高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道釧路湖陵高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑦	1917（大正 6）年 4 月	北海道庁立室蘭中学校（男子校，1917（大正 6）年 4 月） →北海道立室蘭高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道室蘭栄高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑧	1922（大正 11）年 5 月	北海道庁立網走中学校（男子校，1922（大正 11）年 4 月） →北海道立網走高等学校（男子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道網走南ヶ丘高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）

表４　庁立高等女学校から新制高校に至るまでの学校名の変遷（各学校の学校記念誌より作成）

	開校年月	学校名の変遷
①	1902（明治 35）年 4 月	北海道庁立札幌高等女学校（女子校，1902（明治 35）年 4 月） →北海道立札幌女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道札幌北高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
②	1905（明治 38）年 5 月	北海道庁立函館高等女学校（女子校，1905（明治 38）年 5 月） →北海道立函館女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道函館西高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月） →北海道函館稜北高等学校と再編成統合し、北海道函館西高等学校 （共学校，2017（平成 29）年 4 月）
③	1906（明治 39）年 4 月	北海道庁立小樽高等女学校（女子校，1906（明治 39）年 4 月） →北海道立小樽女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道函小樽桜陽高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
④	1907（明治 40）年 5 月	北海道庁立上川高等女学校（女子校，1907（明治 40）年 5 月） →北海道庁立旭川高等女学校（女子校，1915（大正 4）年 4 月） →北海道立旭川女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道旭川西高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑤	1918（大正 7）年 5 月	北海道室蘭区立実科高等女学校（女子校，1918（大正 7）年 5 月） →北海道庁立室蘭高等女学校（女子校，1919（大正 8）年 4 月） →北海道立室蘭女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道室蘭清水丘高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑥	1919（大正 8）年 4 月	北海道庁立釧路高等女学校（女子校，1919（大正 8）年 4 月） →北海道立釧路女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道釧路江南高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月）
⑦	1922（大正 11）年 4 月	北海道庁立網走高等女学校（女子校，1922（大正 11）年 4 月） →北海道立網走女子高等学校（女子校，1948（昭和 23）年 4 月） →北海道網走向陽高等学校（共学校，1950（昭和 25）年 4 月） →網走高校と再編成統合し、北海道網走桂陽高等学校 （共学校，2008（平成 20）年 4 月）

(3) 校歌の再制定

では，表3と表4に示した15校が，旧制中学校から新制高校，もしくは高等女学校から新制高校になるにあたって，校歌への対応に差があったのか否かをみていきたい。表5は，表3に挙げた8校の校歌の歌詞の変遷をまとめたもの，表6は，表4に挙げた7校の校歌の歌詞の変遷をまとめたものである。

表5　庁立中学校から新制高校に至るまでの校歌の変遷（各学校の学校記念誌より作成）

	校歌制定時の学校名	校歌制定年	作詞者	作曲者	歌詞
①	北海道庁立札幌中学校	1905（明治38）年10月	大和田健樹	小山作之助	1.　雲より出でて一百里　富源豊かに注ぎくる　石狩川の沿岸に　広げられたる大原野 2.　原野の西に地を占めて　俯仰愧ぢざる学徳の　修養みづから任じたる　札幌第一中学校 3.　霞のひまにうち望む　夕張札幌恵庭嶽　守る心のけだかさを　教えて立てりとこしえに 4.　調べも清く歌ひくる　豊平川の水の声　倦まぬ心のいそしみを　示して行けり夜昼に 5.　堅忍不抜の精神は　年の半ばを降り埋む　雪の下にも春まちし　百花と共に顕れむ
	北海道札幌南高校	1951（昭和26）年3月	戸津　高之（同校教諭）	小泉　正松（同校教諭）	1.　朝に望む藻岩嶺に　夕べ河畔の豊平に　三年の春のいそしみを　共に励まし競いつつ　ああ若人のこの集い 2.　年の半ばを振りうずむ　雪にきたえし精神は　堅忍不抜ゆるぎ無き　我が先人の旗印　ああつぎ行かんこの誇り 3.　歴史は古りし学び舎に　世紀のいぶき高くして　希望あふるる自由の地　我等が使命謳わなん　ああ札南の我が母校
②	北海道庁立函館中学校	1914（大正3）年11月	土井　晩翠	岡野　貞一	1.　玄冥の北の一道　関門の岸に臨みて　青春の薫にしるく　基おく育英の場 2.　集い寄る九百の子弟　人生の花綻び　身を鍛へ心を練りて　向上の一路を辿る 3.　宇賀の浦万頃の水　駒ヶ岳千仞の山　微を積みて高きに至り　滴より空をもひたす 4.　形ある無言の教　仰げ我が紅顔の子等　業成らば双の肩の上　帝国の運も負かへし 5.　母校の名子弟の誉　花と香と常に伴ふ　任重く道の遠きを　嗚呼健児勉めざらめや
		1925（大正14）年	同上（2.「九百の子弟」→「千余の子弟」）		
		1945（昭和20）年	同上（4.「帝国」→「興国」）		
	北海道立函館高校	1948（昭和23）年3月	藤原　直樹（同校教諭）	酒井　武雄（同校教諭）	1.　火柱のはためく峰も　年古りて緑の臥牛　宇賀の浦風の砂山　波よせてくずれ流るる　見よや物なべてうつろふ　窮みなし流転の相 2.　北の国雪深けれど　その底に草は芽ぐめり　野山荒れ鳥潜めども　やがて来ん春の光に　万象の蘇る見よ　ここにあり不滅の生命 3.　白楊のさやめく丘辺　秋深き梢仰げば　冴え渡る銀河の彼方　幽けくぞ星雲燃ゆる　胸に満つ久遠の思ひ　遥かなり真理の彼岸 4.　限りなき流転の中に　生命あり不壊の学び舎　聞けや今窓の外遠く　新潮の入り来るひびき　よしさらば若人われら　踏まんかな希望の門途
③	北海道庁立小樽中学校	1920（大正9）年2月	岡田　三郎（4期卒業生）	白井規矩郎	1.　あゝ潮陵に暁鐘は鳴る　小樽湾頭ひゞき朗らか　鳳中校のたかき誉を　輝く朝日と　共に歌はん 2.　徳と学とに幾春秋や　励みきそひし我等が誇り　栄光あまねし北海の地に　いや溢るゝよ希望の若血 3.　煙波遥かに西はシベリヤ　わが漕ぐ舟は涯なく行かん　颶風よ叫べ波涛よ狂へ　理想の旗を掲げて行かん
	北海道立小樽高校	1948（昭和23）年4月	同上（1.「鳳中校」→「鳳高校」）		

④	北海道庁立上川中学校	1909（明治 42）年 1 月以前	塩田　弓吉	塩田　弓吉	1.　突兀七千有余尺　大雪山は巍然たり　その秀嶺の姿こそ　北海健児の気象なれ 2.　こんこん一百数十里　石狩川は流れたり　その清絶の姿こそ　北海男児の鏡なれ 3.　寒威肌膚を突裂く日　炎熱金を溶かす時　我上川の中学に　集いいそしみ励まなん 4.　旭ヶ岡の朝ぼらけ　匂ふ桜のいさぎよさ　神居古潭の夕まぐれ　紅葉の赤き真心よ 5.　千山万峯踏破り　狂乱怒涛漕ぎわけて　月の桂も手折らなん　竜の顎の珠採らん
	北海道庁立旭川中学校	1915（大正 15）年 4 月	同上（3.「我上川の中学に」→「我旭川の中学に」）		
	北海道立旭川高等学校	1948（昭和 23）年 4 月	同上（3.「我旭川の中学に」→「我旭川の高校に」）		
	北海道旭川東高等学校	1950（昭和 25）年 4 月	同上（2.「北海男児の鏡なれ」→「北海健児の鏡なれ」）		
	北海道旭川東高等学校	1953（昭和 28）年 9 月	風巻景次郎	長谷川良夫	1.　野辺には花咲き　春の日みちて　大雪はるか　夢かとかすむ　年々あらたに　自然はめぐり　あゝいくたりか巣立ちし庭ぞ　君や我　ここにつどいて　永遠の真理をきわめ　新しく創造の世代をつがん 2.　大空まどかに　秋の日さえて　石狩明るく　静けさみてり　年々変らず　自然はあれど　あゝ幾年か　ふりにし故郷　君や我　こゝにつどいて　人の世の正義を思いさらにまた北国の文化をつがん
⑤	北海道庁立札幌第二中学校	1936（昭和 11）年	土井　晩翠	中田　　章	1.　昨日は暗と荒涼と　雪とに閉ぢし北の海　今は文化の塩寄せて　光日に増す全道の　かなめ札幌ここにして　第二中学基置 2.　荒熊月に吠えけらし　あとをいづくに求むべき　光の基、学窓の　あけくれ嬉し澄みわたる　清くも高きしらべにて　知識求むる若き声 3.　石狩平野末遠く　雲に続きて大陸の　姿を見する雄々しさや　其気を含み粋を吐き　あらたの空に踊り立つ　若き身何の幸ぞ 4.　寒さに強き身を鍛ひ　悩みに堅き節みがき　厳冬の空、雪の下　潜める力草も木も　青陽の春待つ如く　あすの希望に血こそ湧け 5.　津軽の瀬戸の波こえて　あなたの空に爛熟の　香に民衆倦まん時　見ざるやここに養いて　新の力そそぐべく清くするどき健児団 6.　北より下り大勢を　制せし例史の上に　見しやいくたび嗚呼健児　第二中学光栄の　永きをつとめ北海の　郷の力を世に示せ
	北海道札幌西高校	1950（昭和 25）年 8 月	風巻景次郎	平井康三郎	1.　空ひろし　空ひろし　希望は遠し　朋の群　力をあはせ　うち建つる　文化の光　想ふべし　若く正しく　新しく　ああ行く雲に　創造の　調は高く　こだませよ 2.　雪白し　雪白し　生命は正し　朋の群　心はつよく凛として　自律の園に　咲きにほへ　若く正しく　新しく　ああ吹く風に　眉あげて　平和の国を　ひらかずや 3.　風きよし　風きよし　北斗は高し　朋の群　　神秘の謎に　つつましく　眸をつねに　さし向けよ　若く正しく　新しく　ああ若人の　まみ冴えて　叡智のかげを宿さずや　西高校
⑥	北海道庁立釧路中学校	1928（昭和 3）年 4 月	菅原　覚也（校閲　高野　辰之）	信時　　潔	1.　日出づる国の北陲に　神秘を削る丈夫の　関十一州に反響して　曙光あまねし蝦夷が原　瞻よ東方の釧路岬　湖陵に立てる我が学舎 2.　攻学の心自治の魂　久遠の使命胸に秘め　鈴蘭薫る春採の　丘に微笑む若人が　誠を雪に類へつつ　理想は高し阿寒山 3.　学の苑に旦暮の　師恩を讃う五星霜　愛ゆかしき兄弟よ　吹雪く曠野も荒海も　訓の道を守りつつ　共に進まん勇ましく
	北海道釧路湖陵高校	同上（3.「五星霜」→「三星霜」）			

⑦	北海道庁立室蘭中学校	1928（昭和 3）年 11 月	北原　白秋	山田　耕筰	1.　日よ照り輝け　晴れたり　青空　我等は集へり　集へり　集へり　室蘭中学　輝け　我が校　大なり　北海　アイヌモシリ　野に満つ鈴蘭　その香高し 2.　緑よ輝け　晴れたり　有珠岳　我等は学べり　学べり　学べり　室蘭中学　輝け　我が校　質実剛健　朝に夕に　培ふ校風　その香高し 3.　磯よ輝け　晴れたり　白鳥　我等は勢へり　勢へり　勢へり　室蘭中学　輝け　我が校　希望ははてなし　若く若く　とどろく波の穂　その香高し
	北海道室蘭栄高校	1952（昭和 27）年 12 月	土岐　善磨	信時　　潔	1.　雲は晴れたり室蘭の　山より山へと連なる緑よ　仰ぐや有珠岳風遠く　けだかき心希望もあふれて　真理のひかり空深し 2.　友よポプラのしたかげに　語れば潮の香　胸にも満ちずや　鈴蘭摘みにし道いずこ　太平洋の浪おと新たに　世界のひびきいざ聞かん 3.　若きわれらの進むべき　自由のゆくてはあかるく遥けし　咲きてる桜に　月かげに　楽しくこぞるこの春この秋　正義のちから　地に敷けり　栄高校その名にさかえて　北海ここにわれらあり
⑧	北海道庁立網走中学校	1931（昭和 6）年 11 月	神原　克重	岡野　貞一	1.　澎湃たる浪すさべる嵐 日本の東端おこくの岸辺 巨人のごとも嘯き立ちて はるかに呼びかく海の果て ああこれぞ我等の学舎南ヶ丘 2.　半歳とざし、氷雪の下　生命をはぐくむ不断の努力　北見の沃野春いち早く　鬱金に咲きいず福寿草　ああかくぞ我等も鍛えん伸びゆく能力を 3.　海原覆いて寄せくる氷　鋭き光は沖べに顫い　吹雪は荒れておのづからにも　剛健の気象おゝし立つ　ああこれぞ我等の誇れる網走魂 4.　東にうるわし知床岬　高嶺のみ幸は心をきよめ　豊けきたたえ大みずうみの　底ひぞ深かる智慧を求む　ああかくて望みは新し南ヶ丘
	北海道網走南ヶ丘高校	1950（昭和 25）年 4 月	同上		

表６　庁立高等女学校から新制高校に至るまでの校歌の変遷（各学校の学校記念誌より作成）

	校歌制定時の学校名	校歌制定年	作詞者	作曲者	歌詞
①	北海道庁立札幌高等女学校	1912（明治 45）年 6 月	吉丸　一昌	岡野　貞一	1.　豊平川の清き瀬に　心の塵をすすぎつつ　優しうつくし円山の　桜のはなを思ひにて　学びの窓のあけくれを楽しや我は過すなり 2.　雪にも折れぬとど松の　操をおのがみさをにて　彊めて息まず怠らず　日頃の教かしこみて　学びの窓のあけくれを　楽しや我は過すなり
	北海道札幌北高等学校	1951(昭 和 26)年 1 月	大木　惇夫	信時　　潔	1.　アカシヤ薫る緑野の　さやけき園や我が学舎　そよ風の訪れに　答えつゝ新しく刈り入れむ　芳しき知恵の木の実　あゝかくて若人我等　真理を探らむ　むつみつゝ勤しむ者に　慰めあり 2.　手稲の山の青雲の　広けき胸やわが友どち　大空の輝きにこたへつゝ　朗らかに嘯かむ　浄らけき雪の息吹　あゝかくて若人われら　正義を慕はむ厳しくも　つとむる者に慶びあり 3.　豊平川の水清く　沃けき土やわが故郷　夕星のやすらひにこたへつゝ　つゝましくくみとらむ　美しき徳のいづみ　あゝかくて若人われら　平和を祈らむ苦しくも　耐へ待つ者にさいはひあり
②	北海道庁立函館高等女学校	1915（大正 4）年 11 月	武島　羽衣	工藤富次郎	1.　巴の港朝夕に　出で入る船の帆柱の　しげき学問のかづかづは　世の海わたるみをつくし　教訓のまにまに艱苦に耐へて　**誠實あつき女子とならむ** 2.　春は湯の川リリー摘み　秋は大沼舟遊び　冬は四方山白雪の　玉もて飾る銀世界　自然の霊氣を吾身にうけて　**清き操の女子とならしむ** 3.　天つ日嗣のきはみなき　この大御世に生れでて　天皇が恵みにものまなぶ　われらが身こそ幸はあれ　勅語のまにまにいそしみ勤め　**國のほこりの女子とならむ**

	北海道函館西高等学校	1951（昭和 26）年 2 月	風巻景次郎	根上　義雄	1.　春は弥生の草萌えて　つつじが丘に花咲けば　流るる空の雲は淡し　向学の友群れてここに　集えり　ああ君、われら若く　自由の鐘の音　窓になれば　情操をたもちて　共に立てよ 2.　北の港の丘のもと　巴の海に新潮の　岬をめぐる声はひびく　向学の友群れてここに　集えり　ああ君、われら若く　希望は生まれて　胸に満てば　大志をいだきて共に立てよ 3.　秋は臥牛の松の風　栄枯の夢を歌えども　北斗の影は天にかかる　向学の友群れてここに　集えり　ああ君、われら若く　瞳は冴えたり　いよよ深く　真理を求めて共に立てよ
③	北海道庁立小樽高等女学校	1909（明治 42）年 9 月	星野　三郎	野口米次郎	1.　しげりにしげる櫻麻の　**小樽のさとのをとめ子が**　つぎつぎ通ふまなびやは　はたはりひろき織殿ぞ 2.　いざやをしへのみことをば　たていとにして唐大和とつくにぐにのことくさも　あやに錦におりとらん
	北海道小樽桜陽高等学校	1951（昭和 26）年 10 月	風巻景次郎	平井康三郎	1.　眼をはなて海遠く　風かがやかし丘の上　文化の潮ひたよする　港の栄見はるけて　知性はひらく新しく　ああ打ちつどう君や我　空までひびけ歌わずや 2.　眼をはなて空遠く　窓さやかなり香に立ちて　真理の花は咲き匂う　まなびの園に培えば　叡智はみのる自ずから　ああ打ちつどう君や我　自らそだて進まずや 3.　眼をはなて涯遠く　雲たそがるる丘の上　しずかに暮るるひと時は　正しく生きん我がのぞみ　まさやかなれとねがわるる　ああ打ちつどう君や我　北極星を仰がずや
④	北海道庁立旭川高等女学校	1917（大正 6）年 6 月	明石孫太郎（初代校長）	岡野　貞一	1.　旭ヶ岳に出づる日の　赤き光を仰ぎつつ　学べ学びの道により　照らせや人の真心を 2.　石狩川に湧く水の　清き流れをむすびつつ　学べ学びの道により　うつせや人の真心を 3.　清き流れに飛ぶほたる　峰白妙につもる雪　集めて積みて学びなば　わが身の光も出でぬべし
	北海道旭川西高等学校	1952（昭和 27）年 8 月	清水　重道	信時　　潔	1.　研学いそしむ殿堂あり　白亜醒し　堅忍　揺がず　高邁　驕らず　わが蘊む叡智　厳しき歴史を描く　あゝ大雪の峰の雪に　競ふ学舎、三年春秋 2.　天稟きたふる殿堂あり　緑樹蔭濃し　誠実　巧まず　明朗　文らず　わが成す徳器　麗しき精神を容るる　あゝ石狩の淀の鏡に　映す学舎、三年春秋 3.　生命脈うつ殿堂あり　微風香細し　溌剌　衒はず　悠揚　迫らず　わが伸す四肢に　新しき世代を支ふ　あゝ鈴蘭の花の姿に　比ふ学舎、三年春秋
⑤	北海道庁立室蘭高等女学校	（不明）	佐々木信綱	島崎赤太郎	1.　太平洋を望み見る　教への庭につどいつつ　ひろき心を養はれ　学ぶ我等よ嬉したのし 2.　東北一の良き港　けぶり豊かに富みたれど　誠意質素を尊びて　勤しむ吾等楽し嬉し 3.　進みゆく世を進めども　リリーの花の香も清く　**わが室蘭の乙女てふ**　誉をあげむいざ共に
	北海道立室蘭女子高等学校	1948（昭和 23）年 9 月	風巻景次郎	長谷川良夫	1.　眸をあげよ空遠く　入江のはての山青し　若し若し　あゝわが学園　日々につとめてわれら立てば　溌剌まこと姿ただし　見よや見よやこの人 2.　眸をあげよ空遠く　清水が丘の窓の星　冴えよ冴えよ　あゝわが学園　若く正しくわれと学ぶ　生新知慧に光みてり　見よや見よやこの丘 3.　眸をあげよ空遠く　岬をめぐる海ひろし　むつべむつべ　あゝわが学園　和みゆたかにわれら笑めば　鈴蘭むれて薫みてり　見よや見よやこの花
	北海道室蘭清水丘高等学校	1953（昭和 28）年 6 月	風巻景次郎	長谷川良夫	1.　眸をあげよ空遠く　入江のはての山青し　若し若し　ああわが学園　望はるかにわれら立てば　溌剌まこと姿ただし　見よや見よやこの人 2.　眸をあげよ空遠く　清水が丘の窓の星　冴えよ冴えよ　ああわが学園　日日につとめてわれら学ぶ　生新知慧に光みてり　見よや見よやこの丘 3.　眸をあげよ空遠く　岬をめぐる海ひろし　むつべむつべ　ああわが学園　若くただしくわれら磨く　純真常にきよき真砂　見よや見よやこの集を

⑥	北海道庁立釧路高等女学校	1920（大正 9）年 10 月	鈴木　正雄（初代校長）	岡野　貞一	1.　太平洋にのぼる日の　赤き心のまことも て　守りまつらんひたすらに すめ大君のみことのり 2.　釧路大川ゆく水の　流るゝ月日早ければ　つとめはげまんもろともに　学びの科の数々を 3.　都の春に後れじと　北地の雪に咲き出づる　花の心ぞけなげなる　花の操ぞたのもしき
	北海道立釧路女子高等学校	1948（昭和 23）年 8 月	風巻景次郎	伊福部　昭	1.　窓に映る空よ　風は光る丘のほとり　つどえるよき友　あゝわれら　あたらしく求めはげめば　眼いよよさやけし　風よ吹けよ我がつどいよ 2.　草は校庭に芽ばえ　花はひらく見よやいのち　つどえるよき友　あゝわれら　すこやかに立ちてそだてば　姿いよようるわし　花よ笑めよ我がつどいよ 3.　街は翳に沈み　きりは白く霧笛鳴るも　つどえるよき友　あゝわれら　あたたかに和して睦めば　心いよよ明るし　きりよ歌え我がつどいよ
	北海道釧路江南高等学校	1952（昭和 27）年 8 月	更科　源蔵	筒井　秀武	1.　大雪原に生い立ちし　瞳すずしき若人が　野に咲く百合の清純と　叡智を求め集いたる　江南高校　大志あり 2.　阿寒の峰の麗朗に　立つ青雲に眉あげて　遥か世界に鳴り渡る　理想の鐘の声を聞く　江南高校　夢多し 3.　太平洋の渦潮に　濃霧の影は暗くとも　平和の光さぐりつつ　希望に萌ゆる若緑　江南高校　光あり 4.　時の流れは移るとも　動かぬ北の星一つ　心に点す灯となして　真理の道をたどりゆく　江南高校　我が母校
⑦	北海道庁立網走高等女学校	1930（昭和 5）年 11 月	高野　辰之	片山頴太郎	1.　オホーツク海みはるかし 斜里の高嶺をふりさくる この網走に生いたちし　少女我等の心は広し　**少女我等の望は高し** 2.　向陽が丘宵にそびえ　網走川は門あらふ　此の学校にものまねぬ　**少女我等の心は明し　少女我等の望は情し** 3.　鈴蘭かをる野をわけて　白樺志げよ山を訪ふ　此のよよ自然に呼吸する　**少女我等の心は直し　少女我等の望は正し** 4.　尊き教たもひての　桂のきさむバンドもて　此のわかき身をとゝのふる　**少女我等の心は堅し　少女我等の望は遠し**
	北海道向陽高等学校	1951（昭和 26）年 2 月	鈴木　淳一（同校教諭）	松田　喜一（同校教諭）	1.　高波しぶくオホーツクの海　日に照り映ゆる向陽ヶ丘　三とせの春を睦みてここに　学ぶ若人輝く命　向陽高校我が母校 2.　斜里の高嶺は千古にそびえ　網走川は豊かにめぐる　原始の民に思いをはせて　鍛う素朴のたゆまぬ力　向陽高校我が母校 3.　神楽の園に年々萌えて　緑やさしき若葉のさやぎ　平和の鐸高らにかかげ　仰ぐ久遠の理想のひかり　向陽高校我が母校 4.　朔風すさぶ果てにおいて　あすの世紀を追い行く我等　自治と協和の誠心もちて　磨く真理の不断の叡智　向陽高校我が母校 5.　桂のもとに集いて高き　我等が望み展けぞわたる　学びの庭に手に手をとりて　作る新たの美はしき歴史　向陽高校我が母校

表 5，表 6 に示したように，まず，旧制中学校においても，高等女学校においても，すべての学校で校歌が制定されていたことがわかる。だが，新制高校発足にあたっての校歌への対応は，旧制中学校を前身とする高校と高等女学校を前身とする高校で，大きく異なっていた。すなわち，高等女学校を前身とする新制高校は，7 校中すべての学校が，共学化した後，校歌を再制定しているのに対し，旧制中学校を前身とする新制高校では，8 校中 3 校（表 5 の③にあたる北海道立小樽高校，のちの北海道小樽潮稜高校，表 5 の⑥にあたる北海道釧路湖陵高校，表 5 の⑧にあたる北海道網走南ヶ丘高校）で，旧制中学校時代に制定された校歌が，ほとんど歌詞を変更せず，そのまま新制高校にも引き継がれている。さらにくわえて，表 5 の②にあたる北海道立函館高校（のちの北海道函館中部高校）の校歌は，1948（昭和 23）年 3 月に制定されていることから，同校が男子高校であった際に制定した校歌を，男女共学後もそのままうたっていることがわかる。

高等女学校を前身とする高校の場合は，表6の⑤にあたる北海道立室蘭女子高校（前身は北海道庁立室蘭高等女学校，のちの北海道室蘭清水丘高校）や，表6の⑥にあたる北海道立釧路女子高校（前身は北海道庁立釧路高等女学校，のちの北海道釧路江南高校）にみるように，1948（昭和23）年4月に女子高校として発足した際，新たに校歌を再制定していながらも，1950（昭和25）年4月からの男女共学化に伴い，再度，改めて校歌が制定されている。しかしながら，旧制中学校を前身とする高校では，8校中4校が，男子校時代に制定した校歌を，男女共学後も各々の学校の校歌として引き継いでうたうことにしたのであった。

なぜ，高等女学校を前身とする新制高校と旧制中学校を前身とする新制高校で，男女共学化した後の校歌への対応に違いがみられるのだろうか。

先に述べたように，戦前の男女別学体制下における校歌には，ジェンダー意識を反映した語句が頻繁にみられる。歌詞にうたわれている性別に結びついた名詞に着目してみると，高等女学校の校歌では，表6にゴシック体で示したように，「女子」（表6の②にあたる北海道庁立函館高等女学校），「をとめ子」（表6の③にあたる北海道庁立小樽高等女学校），「乙女」（表6の⑤にあたる北海道庁立室蘭高等女学校），「少女」（表6の⑦にあたる北海道庁立網走高等女学校）といった，女学生を表す語句が用いられていることがわかる。男女共学化にあたり，こうした語句を取り除くために校歌を再制定したことは否定できないだろう。ただ，実際のところ，女学生を表す名詞が歌詞に含まれているか否かという問題以前に，男女共学化によって，高等女学校を前身とする新制高校に配属となった男子生徒にとっては，女子校時代に制定された校歌はうたいたくないという思いが強かったようである。北海道庁立室蘭高等女学校と北海道立室蘭女子高校（女子校）を前身とする北海道室蘭清水丘高校（共学校）を例にみていこう。同校では，『清水丘新聞』という学校新聞が刊行されており，1950（昭和25）年9月1日に発行された『清水丘新聞』には，つぎのような記事が掲載されている。

> 道教委の教育方針に従い，本校が創立されて以来四ヵ月，現在もなお校歌ができていない。これに対して三年生の中に問題が出てきた。というのは過去，旧室高時代にやはり校歌がなかった。現在三年生男子は何年も自分たちの学校を表す歌を唱つたことはないのだ。自棄的に室高逍遥歌を唱い，室中校歌を唱つている現状なのである。この際，生徒の与論に従い生徒課側からか生徒会側から校歌の問題について提案されてもよいと思う（『清水丘新聞』1950. 9. 1）。

北海道室蘭清水丘高校の前身である北海道庁立室蘭高等女学校の校歌には，3番の歌詞に「わが室蘭の乙女てふ」（表6の⑤参照）とあることから，北海道立室蘭高校（男子校，のちの北海道室蘭栄高校（共学校））に在籍していたにもかかわらず，居住地により通学区域が変更となり，北海道室蘭清水丘高校に配属校替えとなった男子生徒らが，うたうことを拒絶するのもうなずける。だが，同校は，1948（昭和23）年4月に北海道立室蘭女子高校として発足したのを機に，同年9月に校歌を再制定している。再制定された校歌は，次のような歌詞であった。

1. 眸をあげよ空遠く　入江のはての山青し　若し若し　あゝわが学園　日々につとめてわれら立てば　溌剌まこと姿ただし　見よや見よやこの人
2. 眸をあげよ空遠く　清水が丘の窓の星　冴えよ冴えよ　あゝわが学園　若く正しくわれと学

ぶ　生新知慧に光みてり　見よや見よやこの丘

3. 眸をあげよ空遠く　岬をめぐる海ひろし　むつべむつべ　あゝわが学園　和みゆたかにわれら笑めば鈴蘭むれて薫みてり　見よや見よやこの花

1948（昭和 23）年 9 月に制定された上記の校歌の歌詞には，性別を示唆する名詞は含まれていない。しかも，男女共学後である 1953（昭和 28）年 6 月に，再び制定された校歌の歌詞と比較してみても，それほど大差ない歌詞の校歌が，北海道立室蘭女子高校であった 1948（昭和 23）年 9 月に制定されていた。表 7 は，女子校であった北海道立室蘭女子高校時代に制定された校歌と，その後, 北海道室蘭清水丘高校（共学校）になってから制定された校歌の歌詞の相違箇所を抽出し，まとめたものである。表から読み取れるように，北海道室蘭清水丘高校校歌の 2 番の歌詞は，北海道立室蘭女子高校校歌の 1 番と 2 番を組み合わせた歌詞であり，北海道室蘭清水丘高校校歌の 3 番にある「若くただしく」という歌詞は，北海道立室蘭女子高校校歌の 2 番の歌詞にもうたわれていた。北海道立室蘭女子高校校歌の 3 番にあった「鈴蘭」や「花」という語句が，北海道室蘭清水丘高校校歌では一切なくなっていることから，花に関連する語句が女子生徒を連想されると判断し，男女共学後に制定する校歌では，歌詞に含まないようにしたと推察できるが，実際は，先の『清水丘新聞』の記事で，北海道室蘭清水丘高校の 3 年男子生徒らが「自棄的に」うたっているとされていた「室中校歌」，すなわち北海道庁立室蘭中学校校歌には，1 番の歌詞に「野に満つ鈴蘭　その香高し」と花に関連する語句がうたわれていた（表 5 の⑦参照）。

表 7　北海道立室蘭女子高校校歌と北海道室蘭清水丘高校にみる歌詞の相違箇所

	北海道立室蘭女子高校校歌	北海道室蘭清水丘高校校歌
	1948（昭和 23）9 月制定	1953（昭和 28）年 6 月制定
1 番	日々につとめてわれら立てば	望はるかにわれら立てば
2 番	若く正しくわれと学ぶ	日日につとめてわれら学ぶ
3 番	和みゆたかにわれら笑めば	若くただしくわれら磨く
	鈴蘭むれて薫みてり	純真常にきよき真砂
	見よや見よやこの花	見よや見よやこの集を

（4）男女共学化への不信感

それでは，北海道室蘭清水丘高校に配属となった男子生徒らは，いかなる理由から北海道立室蘭女子高校時代に制定された校歌をうたうことを拒み，「室高逍遥歌」や「室中校歌」をうたっていたのだろうか。これに対しては，当然，複数の理由が考えられるが，最大の理由としては，男女共学化への不満，より具体的に言えば，中学校よりも学力の面や伝統の面で劣位にあった高等女学校を前身とする高校に配属校替えとなったことへの不満があったと推察できる。そもそも 1950（昭和 25）年度から公立高校で全面的に男女共学化することに対しては，各地域の高校在学中の生徒やその保護者，道議会議員から批判の声があがり，反対論が巻き起こっていた。実際に，札幌市内では，北海道立札幌第一高校（旧北海道庁立札幌第一中学校，のちの北海道札幌南高校）が中心となり，市内の公立高校 3 校[8]による協議会が結成され，「強硬な反対運動」（“THE SAPPORO FIRST H. S. JOURNAL”第 44 号，1950. 3. 1，1 面「高校再編成　四区制で強行か　全

面共学実施が目的」）が繰り広げられたほどであった。1950（昭和 25）年 2 月 14 日の『北海道新聞』においても，「“公立高校の男女共学は全学年にわたり強行する”との道教委発表は強い衝撃を与えた」(『北海道新聞』(旭川市内版）1950. 2. 14，2 面「連絡会議を設置」）との記事が掲載され，道教委の強硬姿勢に対する不信感が綴られている。

男女共学化の強行に対しては，居住地によっては，入学した高校を卒業できなくなるという懸念から，男子高校に在学する生徒，女子高校に在学する生徒の双方から不満の声があがったが，殊に，男子高校に在学していた生徒からの声が大きく，それは男女共学校となって以降も，根強く残っていた。たとえば，北海道札幌南高校（共学校，旧北海道立札幌第一高校（男子校））の様子をみると，男女共学に対して，男子生徒と女子生徒のあいだには，かなり温度差があったことがみてとれる。同校で 1953（昭和 28）年 10 月 18 日に開催された座談会では，女子生徒が「私は元女学校に居たので，男女共学に憧れていた」(三年)，「期待して居た通り，素晴らしい学校だなァと思いました」(一年）と述べ，共学に賛成の意を示す一方，男子生徒は「我々はまず大学に入る事が問題」であるのに，「高校生になると，おのずから男女間の意識が変つてくる，それが受験期の男子の気持に影響するという短所がある」から，男女共学は「反対です」(二年）や，中学卒業以後は「分けて各々の個性を伸ばす方が良い様な気がします」(三年）と，共学への不快感をあらわにしている（「学校生活を語る　座談会」『みなみ』札幌南高校生徒会，1953. 12，p. 4-5)。しかも同校では，教員側にも，座談会で発言した男子生徒らと同じような意見が共有されており，座談会に参加した教員は，男女共学について次のように述べている。

> 現在の女子が，男子と同じような条件にあれば，これは相当やれると思う。しかし女子も十七・八になるとやはり家庭で手伝う時間が多くなる。その上に趣味の茶，花道等をやるとすると，どうしても時間的な不利はまぬがれない。そして，それは仕方ない事だ。私は思うんだが，必ず同じ組織に於ける男女共学は反対だ。なまじつか男の学校に入つた為に，したい事が出来ず，十分に個（ママ）生を伸ばさないで卒業してしまう女子もいる。だから自由に学校を選択する様にすれば無理がなくていいと思う。……やつぱり男女両校を必要とするナ（前掲，p. 6)。

上記の発言をした教員は，共学実施から 4 年目に入ってもなお，同校を「男の学校」だと言い切っている。この発言からは，1950（昭和 25）年度より北海道内のすべての公立高校が男女共学を開始していながらも，元々男子校であった同校では，「男の学校」であるという意識が生徒や教員らのあいだに刻み込まれており，制度の転換に伴い，「男の学校」に入ってきた女子生徒をやむなく受け入れているという認識がなされていたことがうかがえる[9]。

先の北海道室蘭清水丘高校においても，男女共学は一筋縄ではいかなかったようである。同校の学校新聞である『清水丘新聞』には，「共学一ヶ月を省みつつ」とのタイトルで，「勉強熱心な男子に刺激されて向上心を燃え立たせている生徒もいる反面，前より一層学問に対する興味を失いつつある生徒もいて，その懸隔が大きくなってきている」こと，さらに，「総じて男女は共にお互いを理解すべく努力している傾向がみられるが，根本的な性格の相違から生ずる溝ばかりは，今のところ如何ともしがたい」とのことが綴られている（『清水丘新聞』第一号，1950（発行月日不明))。戦後の教育改革に伴い，性別にかかわりなく，同一の教育を受ける権利が保証されることとなった。だが，当の高校在学中の生徒，とりわけ男子生徒らからしてみれば，男女間での

学力の差や，卒業後の進路選択の相違が顕著であるなか，在学途中に配属校が変更となり，しかも旧女子校に配属となるのは，憤懣やる方ない出来事だったのであろう。そうした不満の表れの一つが，北海道立室蘭女子高校時代に制定された校歌ではなく，本来，自分たちが在学していたはずである学校の「室高逍遥歌」や「室中校歌」をうたう男子生徒の姿につながったと解される。

5．おわりに

本稿では，北海道内の 7 地域に設置された旧制中学校を前身とする高校，並びに高等女学校を前身とする高校に着目し，戦後の制度的・社会的状況の変化に応じて，各々の学校が自校の校歌に対して，いかなる対応をとったのかを検討してきた。

旧制中学校と高等女学校は，どちらも「高等普通教育ヲ為ス」(『官報』第 4678 号，1899. 2. 7，第 4679 号，1899. 2. 8）ことを「目的」とした中等教育機関であったが，学科目に関していえば，旧制中学校の方が，教授時数が多く，教授内容の難易度も高い学科目が多かった[10]。そうしたなか，音楽教育に関しては，高等女学校の方が旧制中学校よりも，より難易度が高く，より広範な内容が教授されることになっており[11]，しかも旧制中学校に至っては，1886（明治 19）年に文部省令第十四号「尋常中学校ノ学科及其程度」が公布されてから 1931（昭和 6）年の「中学校令施行規則改正」時まで，音楽教育を行う学科目として設けられていた「唱歌」を実施しないことさえ，法令によって容認されていた。大正期末の様子をみると，全国の旧制中学校における「唱歌」の実施率は，16％ 程度となっている[12]。旧制中学校においては，そもそも音楽教育に関する学科目自体を実施していない学校が，大半を占めていたのである。

ただ，音楽教育に関わる学科目を実施していないからといって，校歌を制定しないという選択肢はなかったようである。高等女学校と比較すると，旧制中学校の方が，開校してから校歌を制定するまでに時間がかかる傾向はあるものの，表 5，表 6 に示したように，本稿で取り上げたすべての学校が旧制の学校においても校歌を制定していた。表 5 に示した旧制中学校のうち，校歌制定時に「唱歌」の担当教員が所属していたのは，北海道庁立札幌中学校（のちの北海道札幌南高校），北海道庁立函館中学校（のちの北海道函館中部高校），北海道庁立上川中学校（のちの北海道旭川東高校）の 3 校であったが[13]，「唱歌」担当の教員がいなくとも，北海道庁立釧路中学校（のちの北海道釧路湖陵高校）のように「北海道庁立釧路高等女学校の女性教師お二人の協力を得て歌唱指導を」(北海道釧路湖陵高等学校創立百周年・定時制九十周年記念事業実行委員会記念誌部会編 2013，p. 58）行ったり，北海道庁立室蘭中学校（のちの北海道室蘭栄高校）のように「校歌練習講師」を雇用し，校歌の練習をすることで，校歌は皆で歌唱できるよう，手筈が整えられていた[14]。

校歌を制定すること自体は，男子のみが通った旧制中学校においても，女子のみが通った高等女学校においても同様に行われていたが，戦後の教育改革によって，旧制中学校と高等女学校がそれぞれ男女共学の新制高校となった際，校歌を再度，作成し，制定し直すか否かは，旧制中学校を前身とする高校か，高等女学校を前身とする高校かによって，相違がみられた。すなわち，高等女学校を前身とする高校では，本稿で対象としたすべての学校で，男女共学後に，再度，校歌が制定し直されているのに対して，旧制中学校を前身とする高校では，8 校中半数が，男子校として設置されていた期間に制定した校歌を，男女共学後もそのまま引き継いだのであった。

小山は，男女共学について「教育機会や教育水準の男並み化という視点でとらえられ」，「男子に対する教育のあり方が基準にされ，そのレベルに女子が到達していくということが共学教育であった」と述べている（小山 2009，p. 25）。男子高校から共学高校となった学校に在学していた男子生徒らからすれば，自分たちこそが基準軸なのであり，後から入ってきた言わばよそ者の女子生徒のために校歌を再制定することは，許諾し難いことだったのであろう。本稿で扱った 7 地域の新制高校は，1950（昭和 25）年度より，小学区制が布かれたことで男女共学が成立したが，戦前の男女別学体制時のジェンダー観は，生徒や教員のあいだにそのまま継承されていた。北海道札幌南高校の教員による「男の学校」という発言や，配属先の高校の校歌ではなく，「自棄的に室高逍遥歌を唱い，室中校歌を唱ってい」た北海道室蘭清水丘高校の男子生徒の姿が，その証左であるといえよう。

校歌は，「学校集団の全成員あるいは一部によって学習され、共有され、伝達される」学校文化である（耳塚　1986「学校文化」）。戦後の教育改革によって，戦前の男女別学体制から教育制度上の男女平等が実現した。北海道では，すべての公立高校が男女共学化されることとなり，表面上は，男女が同一の学校で，同一の教育を受けることが保証されたが，内実としては，校歌という学校文化のひとつにさえ，前身校の性差に基づく非対称的な権力構造が入り込んでいたのである。

本稿は，限られた学校の事例検討に留まるものであるが，旧制中学校を前身とする高校と高等女学校を前身とする高校の校歌のありようを描き出した。今後は，戦後における校歌再制定の動きの解明に向けて，他都府県における学校の事例検討が課題となる。これについては別稿に譲ることにしたい。

【文献】
小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房
小山静子・石岡学編 2021『男女共学の成立―受容の多様性とジェンダー―』六花出版
近代日本教育制度史料編纂会編 1957『近代日本制度史料』第23巻, 講談社
須田珠生 2020「近代日本の小学校にみる校歌の歌詞の変容と郷土との関わり」『音楽教育学』第49巻第2号，p. 13-24
北海道教育委員会編 1950『北海道教育行政概要　昭和二四年度』北海道教育委員会
北海道立教育研究所編 1989『北海道教育史　戦後編六巻』北海道立教育研究所
耳塚寛明 1986「学校文化」『新教育社会学辞典』東洋館出版社
文部省総務局文書課 1903『日本帝国文部省年報第二十九年報』（自明治三十四年至明治三十五年）
山崎長吉 1977『北海道教育史』北海道新聞社

【学校記念誌，学校新聞，生徒会雑誌等】
大阪府立北野高等学校校史編纂委員会編 1973『北野百年史―欧学校から北野高校まで―』北野百年史刊行会
『札幌北高等学校校歌』北海道札幌北高等学校生徒会（出版年記載なし）
札幌西高新聞縮刷版刊行委員会編 1965『札幌西高新聞縮刷版　1950-1965』
創立全日制七十周年・定時制五十周年記念事業協賛会編 1992『大地の稔り』北海道岩見沢東高等学校
創立百周年記念誌編集委員会編　2006『北海道根室高等学校創立百周年記念誌』北海道根室高等学校創

立百周年記念事業協賛会
創立100周年記念誌編集委員会編　2007『この坂から　北海道函館西高等学校100周年記念誌』北海道函館西高等学校100周年記念事業協賛会
創立100周年記念事業協議会記念誌部会編　2003『潮陵百年』北海道小樽潮陵高等学校創立100周年記念協賛会
創立六十周年記念誌編集部編　1978『北海道室蘭栄高等学校創立六十周年記念誌　希望は果なし』創立六十周年記念協賛会
北海道旭川西高等学校『昭和63年度　学校要覧』
北海道旭川西高等学校創立100周年記念誌編集委員会編　2008『北海道旭川西高等学校創立100周年記念誌』北海道旭川西高等学校創立100周年記念事業協賛会
北海道旭川東高等学校「創立100年誌」編纂委員会編　2004『創立100年誌』北海道旭川東高等学校創立全日制100周年・定時制80周年記念事業協賛会
北海道網走向陽高等学校創立六十周年記念協賛会編集部編　1982『向陽六十年史』北海道網走向陽高等学校創立六十周年記念協賛会
北海道網走向陽高等学校『平成18年度　学校要覧』
北海道網走南ヶ丘高等学校創立50周年記念協賛会編　1973『50年史誌』北海道網走南ヶ丘高等学校創立50周年記念協賛会
北海道小樽桜陽高等学校創立100周年・新校舎落成記念事業協賛会　記念誌部会編　2007『北海道小樽桜陽高等学校100周年記念誌』北海道小樽桜陽高等学校創立100周年・新校舎落成記念事業協賛会記念誌部会
北海道釧路江南高等学校創立80周年記念誌編集委員会編　1998『創立80周年記念誌』北海道釧路江南高等学校創立80周年記念誌編集委員会
北海道釧路湖陵高等学校創立百周年・定時制九十周年記念事業実行委員会　記念誌部会編2013『誠愛勇の湖陵百年』北海道釧路湖陵高等学校創立百周年・定時制九十周年記念事業実行委員会
北海道札幌北高等学校創立九十周年記念事業協賛会編　1992『北高九十年』北海道札幌北高等学校創立九十周年記念事業協賛会
北海道札幌北高等学校『平成25年度　学校要覧』
北海道札幌西高等学校創立90周年・定時制80周年記念誌編集委員会編　2002『創立90周年・定時制80周年　記念誌』北海道札幌西高等学校創立90周年・定時制80周年記念事業協賛会
北海道札幌南高等学校創立百年記念協賛会百年史編集委員会編　1997『百年史　北海道札幌南高等学校』北海道札幌南高等学校創立百年記念協賛会百年史編集委員会
北海道函館中部高等学校百周年記念事業協賛会編　1995『函中百年史』北海道函館中部高等学校百周年記念事業協賛会
北海道函館中部高等学校『平成25年度　学校要覧・教育計画』
北海道函館西高等学校『平成25年度　学校要覧』
創立90周年記念行事協賛会編 1995『函館西高新聞　縮刷版』創立90周年記念行事協賛会
北海道室蘭栄高等学校『平成25年度　学校要覧・教育計画』
北海道室蘭清水丘高等学校『清水丘新聞』
北海道室蘭清水丘高等学校『平成25年度　学校要覧』
『みなみ』札幌南高校生徒会，1953. 12
六十周年記念協賛会事業部編 1980『北海道室蘭清水丘高等学校創立六十周年記念誌　清水丘六十年』北海道室蘭清水丘高等学校創立六十周年記念協賛会
*The Minamiko*縮刷版刊行準備会編 1982『札幌南高校新聞縮刷版　1949-1982』

【史料】
『官報』第829号，1886. 4. 10
『官報』第2538号，1891. 12. 14
『官報』第3518号，1895. 3. 26
『官報』第3553号，1895. 5. 7
『官報』第4678号，1899. 2. 7
『官報』第4679号，1899. 2. 8
『官報』第5298号，1901. 3. 5
『官報』第5312号，1901. 3. 22
『官報』第5593号，1902. 2. 28
工藤富次郎 1918. 1. 1「小学校に於ける校歌の制度に就て」『音楽界』第195号，p. 50-52
谷沢竜史 1951. 11「校歌寸言」『教育創造』第4巻第11号，高田教育研究会，p. 39
『北海道新聞』1950. 2. 14,2面，「連絡会議を設置」
文部省普通学務局編 1924. 12,1925. 12,1927. 1,1927. 10『全国公立私立中学校ニ関スル諸調査』
山松鶴吉 1913『尋常小学校管理教授及訓練の実際　第二学年』同文館
『読売新聞』1953. 5. 15,6面「創立八十周年の浅草小へ校歌　卒業生土岐氏が作詞」
『読売新聞』1956. 6. 30,2面「校歌に土地の愛情を」

脚注

1）　たとえば，1913（大正2）年に『尋常小学校管理教授及訓練の実際』を刊行した東京高等師範学校講師の山松鶴吉は，校歌について「校訓の趣旨を徹底せしむる一方法として，其の趣意を歌詞によみ含めたるものを校歌とい」い，「校訓の趣旨を体得せしむる上に於て，校歌を制定することが必要なのである」と説いている（山松1913,p. 542）。同様に，函館高等女学校教諭であった工藤富次郎も雑誌『音楽界』のなかで，校歌とは「単なる教訓的のもの」である校訓を「音楽的に美化」したものであり，これは「審美的若くは道徳的情操に訴へ」るものだと論じている（工藤 1918. 1. 1,p. 51）。

2）「大阪府立北野高校校歌の歌詞にある「北野高校」は，1915（大正4）年に制定された当初は「北野中学」とうたわれていた。また現在，「紅顔の子弟千有余」とうたわれている箇所は，制定当初は「紅顔の子弟幾百」であった。

3）　1902（明治35）年2月28日発行の『官報』（第5593号）には，文部省告示第三十一号として「北海道庁立札幌高等女学校ヲ北海道札幌区ニ設置シ明治三十五年四月より開校ノ件認可セリ」と記されている。

4）　10校の設置当初の設置主体の内訳は，北海道庁立が7校（札幌，函館，小樽，旭川，釧路，岩見沢，深川），町立が2校（名寄，滝川），区立が1校（札幌）であった。

5）　なお，北海道内でも，一部の公立高校では，1948（昭和23）年4月より男女共学が開始された。たとえば，札幌市に隣接する江別町（現在の江別市）では，町内に北海道庁立江別高等女学校はあったが，それと対になる旧制中学校はなかったことから，1948（昭和23）年4月に江別高等女学校が北海道立江別高校になったのと同時に，男女共学校となっている。

6）　第二項から第四項では，次のような方針が掲げられた。第二項「六三三を一貫して考慮する」，第三項「教育の機会均等を主として学校分布を考慮する」，第四項「一学級定数を五十名以下とし，且つ十八学級を最高標準とする。但し大都市においては暫定的に二十四学級まで認める」（北海道教育委員会編　1950『北海道教育行政概要　昭和二四年度』北海道教育委員会，pp. 26-27）。

7）　なお，農業課程は全道10学区，水産，商業，工業課程は全道1学区が通学区域として定められた（北海道教育委員会編　1950『北海道教育行政概要　昭和二四年度』北海道教育委員会，p. 34）。

8）　北海道立札幌第一高校，北海道立札幌女子高校（旧北海道庁立札幌高等女学校，のちの北海道札幌北高校），市立札幌第一高校（旧札幌市立高等女学校，のちの北海道札幌東高校）の3校。なお，北

海道立札幌第二高校（旧北海道庁立札幌第二中学校，のちの北海道札幌西高校）は，同校の山本梅雄校長が小学区制・男女共学に積極的な推進論に立っていたという理由から，反対運動には参加しなかった（北海道札幌南高等学校創立百年記念協賛会百年史編集委員会編　1997『百年史　北海道札幌南高等学校』北海道札幌南高等学校創立百年記念協賛会百年史編集委員会，p. 262）。

9）　北海道札幌南高校の学校新聞である“*The Minamiko*”　第20号に掲載された座談会では，女子生徒から「学校側は私達女子をどうお考えになつているか，わかりませんが，今の南高の女子は男子に圧倒されているのですね。もう少し経つたら女子が南高から消えて旧一中になつてしまう様な気がします」（三年）と，学校が女子生徒を蔑ろにしているという不満が述べられている（1954年7月23日，「予備校化に前進　不明朗なクラス編成―異常化たどる男女の間　やめてほしいコース別―」）。

10）　たとえば，1901（明治34）年3月に公布された「中学校令施行規則」と「高等女学校令施行規則」を比較してみると，旧制中学校で行われることになっていた「国語及漢文」，「博物」，「物理及化学」は，高等女学校では，「国語」，「理科」とされ，旧制中学校の方が，より詳細で，かつ広範な内容が教授されていた。また，教授時数を比較すると，旧制中学校の「博物」，「物理及化学」は，「博物」が第一学年から第三学年まで週2時間，「物理及化学」は，第四，第五学年に週4時間配当されていた（1901（明治34）年3月公布「中学校令施行規則」）のに対し，高等女学校の「理科」は，第一学年から第三学年までが週2時間，第四学年は週1時間の配当であった（1901（明治34）年3月公布「高等女学校令施行規則」）。

11）　高等女学校（本科）では，音楽教育を行う学科目として「音楽」が置かれ，歌唱の他に「楽器用法」の教授も求められていた。戦前の中等教育機関において，法令上，授業のなかで「楽器」を扱うことが定められていたのは，唯一，高等女学校（本科）だけであった。

12）　文部省普通学務局編　1924. 12,1925. 12,1927. 1,1927. 10『全国公立私立中学校ニ関スル諸調査』より算出。

13）　北海道庁立札幌中学校，北海道庁立函館中学校，北海道庁立上川中学校の3校の「唱歌」担当教員名とその在職期間は次の通りである。北海道庁立札幌中学校，下村重吉（書記・助教授心得），1904（明治37）年5月6日から1906（明治39）年4月6日。北海道庁立函館中学校，太田盛造　（教諭兼舎監），1912（明治45）年6月5日に同校に就職（退職年月日は不明），地理・唱歌兼任担当。北海道庁立上川中学校，塩田弓吉（教諭），1905（明治38）年4月1日から1912（大正元）年11月（北海道札幌南高等学校創立百年記念協賛会百年史編集委員会編　1997『百年史　北海道札幌南高等学校』北海道札幌南高等学校創立百年記念協賛会百年史編集委員会，p.741，北海道函館中部高等学校百周年記念事業協賛会編　1995『函中百年史』北海道函館中部高等学校百周年記念事業協賛会，p.144，北海道旭川東高等学校「創立100年誌」編纂委員会編　2004『創立100年誌』北海道旭川東高等学校創立全日制100周年・定時制80周年記念事業協賛会，p.586より確認）。

14）　北海道庁立室蘭中学校では，天皇即位の「御大典奉祝記念事業」の一貫として校歌が制定された。記念事業の収支によれば，「校歌練習講師への謝礼」として20円が支払われている（創立六十周年記念誌編集部編　1978『北海道室蘭栄高等学校創立六十周年記念誌　希望は果なし』創立六十周年記念協賛会，p. 57）。